

この世界では、貧富の差や戦争状態、性差別などで「命の危険がある」「安心して生活できない」「学校にも行けない」という人たちが大勢いる。テレビ映像やパソコン・スマホの動画サイトなどでは、毎日不条理な状況が映し出され、協力や支援が訴えられている。幼い子や同世代の子たちの痩せ細った手足、力ない動作、悲し気な大きな瞳、それらを見るたびに、胸が痛み、やり切れない気持ちに襲われる。だから、募金などがあれば必ず協力してきた。けれども、それだけでは足りないのではないかと、ずっと思っていた。私にもっとできることは無いのか、ユニセフなどの国連機関や JICA などの NGO の活動について詳しく調べていた。

中学一年生の二月、ある先生から空缶リサイクルでユニセフに毎月寄付を行っている家族がいることを知った。その家族の優しさに心が温くなるのと同時に、私が求めていた活動のヒントになると思った。早速、一人で空缶集めを始めた。空缶は約二千個で三千円になる。それを目標に掲げたが、私一人の力では百個程が精一杯だった。継続的な支援のためには、毎月二千個が必要なことから無理なのは明らかだ。けれども私は簡単には諦めたくはなかった。そんなある日、校門で朝のあいさつ運動をしているときに、生徒会に協力してもらったら実現できるのではないかと思いついた。私が通っている中学校の生徒数は五百人を超える。全員で集めるならば、一人たった四個持ってくるだけでよいのだ。

幸い、生徒会では以前からプルタブやペットボトルなどのリサイクル活動を行っていた。伝統の力も私に味方してくれると思った。私は生徒会役員を務めていたので、すぐに役員の会議でアルミ缶回収と継続的な国際支援を提案してみた。賛同はすぐに得られた。しかし、私は具体案を持っていなかった。回収方法や回数、業者との交渉、募金先、募金金額など決定すべき点がたくさんあった。そのため、なかなか学校からの了承を得ることができなかった。先生方や他の生徒会役員と会議を重ね、実行するまで一年もかかってしまった。今年度の四月から募金は開始された。深く話し合った分、ホームページによる呼びかけなど学校も全面協力してくれた。

回収したアルミ缶は四か月で一万個以上になった。業者がある程度の個数を集めないと回収に来てくれないので、入金が遅れる誤算はあったが、九月からいよいよ支援を始めることになった。

今回の体験は、私に信念を貫くことの大切を教え、大きな充実感を与えてくれた。協力してくれる仲間には感謝しかない。皆の優しさを信じてよかった。誰もが、具体的な機会さえ与えられれば、善意と温かな心を発揮できるのだと思う。少し工夫したり、見方を変えたりすれば、国際協力や国際支援も身近なところから始められる。私たちのリサイクルによる国際支援がそうだったように。